図書版

島木健作全集

第四巻

島木健作全集

第四巻

国書刊行会版

島木健作全集 第四巻

昭和51年4月15日　印刷
昭和51年4月25日　発行

定価 3800円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著　　者　島木健作
著作権者　朝倉　京
発 行 者　佐藤今朝夫

制作・尾沼 汎

〒170 東京都豊島区巣鴨3—5—18
発行所 株式会社 国書刊行会
電話 (917)8287(代表) 振替・東京5—65209

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

第四巻 目次

再建……三
解題……五三五

監修
小林秀雄
中村光夫
稲垣達郎

編集
大久保典夫
小笠原克
高橋春雄

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

再

建

一

　日がおちると、晩秋の乏しい光りのなかに黄いろく浮きあがつてゐた田の面が足早にせまつてくるうす暗みの底にたちまちとつぷりと沈んでしまつた。同時にあたりがひつそりとしづまりかへつた。稻扱機の藁をはじく音も、地にひびく石油發動機の音もいまはやんだ。いそがしい收穫の一日が終つたのである。百姓たちの群は畦道へ出てくると、そこで小さなかたまりにわかれて、右へ左へ急ぎ去つた。歸りおくれた人たちが、田の面を這ふやうにちらほら動いてゐる姿が、遠くから蟻のやうに小さく見える。その田はもうほとんど刈りとられ、横たほしになつた晩稻が、明日の日を待つてゐるばかりである。空つぽになつた田の上を、內海から吹きあげてくる風は、夕べはもうかなりにつめたい。小川の水のおちる音と、叢の蟲の音が、ひとしきり高くなつた。

　女が一人、畦道をあるいて來て、溝をひとまたぎして、村道へ出た。蟲の音がはたとやんだ。女は道へ出ると、そこにしやがんで、そのまゝぢつとうごかずにゐた。肩で大きく息をし、吐く息ばかりが苦しさうである。うつぶして、兩手のなかに頭をうづめ、しばらくはさうしてゐたが、やがて靜かに立ち上つた。よろよろする足を踏みしめ、ものうささうにあるきだした。手甲や脚絆をそのままに、古びた上つぱりを着てゐるのを見ると、田圃からそのまま來たものらしい。さういへばうしろからみる亂れた髮の毛の間には、籾殼や、藁屑らしいものがくつついてゐた。しばらく行つて立ちどまり、休んではまたあるきだす。ひきずるや

うな足取りは苦しさうに見えたが、そのくせべつに前こごみになつてゐるのでもない。それどころか反對に肩をうしろにひき、胸から腹をぐつと前につき出して、心もち反るやうにしてあるいて行く。うす闇のなかにもはつきりそれと知れるやうに女は姙婦であつた。それももう臨月にちかい様子である。

村道は暗く、人通りもなく、靜かだつた。折から二十日ほどの月がのぼつて、空の一角にほんのり明るみがさし、その明るみのなかに、行手の、最初の農家が照らし出された。赤い灯もみえる。村道から右手へ切れこんでゐる細道を少しはいつたところである。女は目ざすその家にやうやくたどりつくと、はねつるべが上げたままになつてゐる井戸の前をとほり裏口から聲をかけてはいつて行つた。

「今晩は、――おかさん、山田のおかさん、をつたかや？」

土間の隅にうづくまつて、ゆるんだ唐鍬の柄にくさびをうちこんでゐた、この家の主婦のおちかが近づいて來た。

「あ、大山のおつかさん、おまへ、まア、どうかしたのかえ？」うすぐらい燈火の下に見た、大山のおつ母(かあ)お兼の凄いほどに青く、眼のつりあがつた顔に、おちかはおもはずおどろきのこゑをあげた。

「春ちやん、おいでただらうか？　おらあ春ちやんに一つ診てもらはうとおもうて來たんだけど……」

「春はゐましたけんど。――そんならなにも、おつかさん、そんなえらい目えしてわざわざ來んでもいいに。知らしてくれさへすりや、いつでもこつちから春をやるこつたに。」

「今日はなあ、おかさん、おらあ朝つからどうも氣分がわるうてなあ。でも無理して田圃に出たところ、暮れがたからいよいよ苦しうなつてさ、しばらく田圃さ寝てゐたんだ。少しをさまつたら家さ歸らうおもつたんだけど、今度はまだ一度も、お醫者にも産婆さんにも診てもらはんよつて、一度、春ちやんに診てもらつ

たらとおもつてなあ。この間つからさうおもつてはゐたんだけど、いよいよとならなきや、やつぱしだめなもんで、――」

苦しさうに息をつき、おちかが汲んで出した水を一口のんだ。うながされて、重いからだを上り端まで運んで來てそこにかけると、

「おかさん、おらあ、今度の孕みぐあひ、どうもいつもとはちつとばしちかふやうにおもふんだ。」と、にはかにこゑをおとして言つて、思ひ込んだ眞劍な目つきをした。

「ちがふつて、どう？」

「おら、どうも、雙兒を孕んどるらしくおもふんだが。」

「雙兒だつて？　そりやかへつておまへさん、お目出たいこつちやないかね。なにも心配(しんぺえ)するほどのこたアありやしないやね。一人そだてるも二人そだてるもおんなじこんだ。かへつてたのしみでよからうわい。――まア、こつちさ上りやんせ。」

いひながら外へ出、少しはなれた納屋の方に向つて、「春乃、春乃、」と、聲高く呼んだ。すぐに、若い女のこゑで返事がして、娘の春乃が納屋から出て來た。横も縦も小さな見はえのしない女である。色は黒く、薄い髪の毛をひきつめにしてゐる。象の眼のやうに細い眼が、柔和ないろをたゝへてわらつてゐた。きれいに澄んだ黒い瞳と、締りのある口もとと、小柄ながら、どこかゆとりのあるおちついたものごしが、普通の百姓娘とちがふといへばいへるところである。しどけなく膝を崩して坐つてゐる、訪ねて來た女の様子を一と目みると、すぐに自分の呼ばれたわけをそれとさとつた。眼で問ひながら、母親の方を見かへつた。

「ああ、お前まだ知らなんだかえ、それ、池田（部落）の大山んとこのおつかさんだ。」と、おちかがいつ

た。
　春乃は挨拶をし、手足を洗つて上へあがつた。汚れた仕事着を脱いで、小ざつぱりとしたふだん着に着かへ、眞白な上つぱりをその上に着た。奥から小型の手提鞄を持つて來てなかを調べてゐる。そのあひだに母親は蒲團を敷き、枕もとに屏風を立て廻した。姙婦はいたはられながら、多産婦らしく懸垂した大きな腹部を重たさうにひきずるやうにして、蒲團の上に横になつた。電燈の下でみるお兼の額には脂汗がじつとり浮いてゐる。枕もとに坐つた春乃とはじめて視線が出あふと、お兼はにはかに泣きだしさうな顔になつてからだの苦しさを訴へはじめた。年は三十七だが、つぎつぎに生れて今度は七人目だといふ。胎児が二人ゐるらしいといふことを、春乃に向つてもくりかへし訴へるのだつた。臆測から來る恐怖が、今はもう動かしがたい事實としてきまつてしまつたかのやうな、錯覺をあたへてゐるものらしい。それからいひにくさうに、大便がまつすぐ出ずに、横の方から出るやうな感じがするとつけ加へた。
「雙兒なんぞ生んだものなら、どうするべな、おかさん。おら、とつても八人もの子に食はしちやいけねえものな。」
　おびえた動物のやうな小さな眼を、きよろきよろさせながらいつた。
　すぐに強い、さはやかなアルコホルのにほひがあたりにひろがつた。
　春乃はていねいに診て行つた。先づ子宮底の部分をさぐつてみたが、普通ならば胎児の臀部が手にふれる筈なのに、それらしい抵抗が少しもない。きはめて柔軟なのである。春乃はすぐに位置異常を直感した。次に兩側をみ、下腹部をみた。どうも横位であるらしくおもはれるので、聽診器で心音を聞いてみたが、つひにそれを聞くことはできなかつた。少し心配さうないろが、春乃の顔にうかんだ。この際もし心音さへ聞き

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

得たら、姙婦に胎兒の位置がどうなつてゐるかをつたへることができるのだ。雙兒でないこともわかつてゐながら、はつきりそれを告げて、安心をあたへることができないのを、春乃は殘念におもつた。
「をばさん、四五日たつたら、わたしをばさんとこへ伺つて、もう一ぺん見せていただくから。大して心配はないとおもふけど——」
心配させてはわるいとおもひ、どうしようかと、少しはためらつた。しかし結局診たとほりの結果を詳しく話してきかせるほかはなかつた。
「いや、いや、春ちやん、おまへにわざわざ來てもらつたりせんかていいわ。おらがこつちさやつてくるだから。」お兼はあわてて、なぜかむきになつてそれを主張した。
「そんなにあるいたりしちや、だめよ、をばさん、仕事もなるべくやめて休むやうにしなくちや。——心臓も弱つてゐるやうだし。」
「なあに、なんともねえだ。おらあ、いままで、いつだつて、生む前の日まで働いて來ただもの。」
さういふ口の下から、下駄をつつかけようと下り立つた足もとがふらついて、よろよろし、うしろに立つた春乃が、あわててはだしで土間にとんで、帶をとらへて支へた。
おちかが、黃いろくくすんだ提燈に灯をともして來て、春乃に持たせた。ことわるのを無理に押して、春乃はお兼につれ立つて家を出た。お兼の家まで送つて行くのである。手をつないでしづかにあるいて行つた。月がいつかかくれて二人の姿はもう見えず、提燈の灯だけが、かなり遠くなつても、しばらくのあひだゆらめいてゐた。道の折れまがつたところでそれが消えるまで、おちかはあとを見送つてゐた。

二

五日目に春乃は約束どほりにもう一度お兼を診に行つた。この村の池田部落にあるお兼の家は、春乃の家から十町ほどはなれたところにある。弘法大師がこの地方に掘つたとつたへられる溜池の一つの土手を行き、土手の道の曲るところで自轉車を下りて少しあるいた。鞄をかかへた春乃が庭へはいつて行くのを見ると、納屋の前に筵をひろげて大根を干してゐた老婆が、聲をあげてかけよつて來た。すぐに向うを向き、あわただしく嫁の名を呼びながら家のなかへかけこんだ。庭にあそんでゐた六つから三つぐらゐまでの三人の子供らが、もの珍らしさうに春乃の腰にまつはりついて來た。鞄のなかに入れて持つて來た袋の飴玉を、子供らにわけてやりながら、春乃は老婆のあとについて家へはいつた。

姙婦は奧まで眞直に見通せる狹い家の六疊の片隅に休んでゐた。むつとする不快なにほひがあたりにこもつてゐる。昨日まで起きてゐたのだが、どうにも息ぎれがするので今日は朝から寢てゐたといふ。春乃の診察の結果は、今日も亦さきの日と同樣に、心音はきこえなかつたが、右斜經線の方向に胎兒の頭がふれたので、外廻轉をしておいた。しかし春乃は、やはり一度は醫者に診せておくべきだとおもひ、診察をすました手を洗ひながら、輕い調子でそれをすすめる言葉をいつた。すると、今まで思ひがけない春乃の來訪に笑ひさへ交へてしやべつてゐた二人の女のこゑがふいに止んだ。春乃は何氣なく顏をあげて、自分を見てゐる女たちの意外に眞劍な眼に出合つた。その表情がくづれると、憂はしげな、救ひを求めるやうな顏になつた。

「どうしてもお醫者に診せねばなんねえだかなア。」と、老婆は聲をおとしていつた。げつそりと氣落ちのしたこゑであつた。

「いや、それはね、おつかさん。」と春乃はにはかに強く打ち消すやうに言つた。春乃の胸には思ひあたるところがあつたのだ。「お醫者に診せるといつても、何も今すぐに診せなきやならないつてわけぢやないんですよ。わたし今とりあへず手當てをしておいたから、これで調子よく廻轉すればそれでよし、この次にもう一度わたしが診にくるまでに、もしも廻轉してゐないで、からだが苦しいやうでしたら、その時にはまたその時でいいやうにしますから。どうしてもお醫者を招ばなくちやならない時にはわたしからちやんとたのんであげますし、ちつとも心配はいらないの。」

春乃にはいまはすべてが明らかなのであつた。そこに氣づくことの餘りにおそかつた自分を恥かしいものにさへおもつた。さきの日、四五日中にこつちから診察に出向くといつたときの、おかねの狼狽ぶりが、彼女の眼にうかんだ。それからまた、今日ここへ來た彼女を最初にみとめたときの、老婆のあわて方や、たつた今醫者をいひだしたときの二人のあわて方も。それらはすべておなじところから來てゐるものだつた。春乃はさきの日お兼が自分のところへ來たのでさへ、どれだけの躊躇の末であるかをおもつた。自分に對しては一錢の診察料も謝禮金も必要としないことを今のうちにはつきりと告げておいた方がいいかも知れぬ。しかし、わるくするとそれは相手を益々尻込みさせることにもなるだらう。春乃はおもひかへし、今はただ今までにもまして明るい、相手に少しの屈託をも與へない言葉と態度のなかに彼女の眞情をこめるのほかはないのだつた。

二日目に一度、三日目に一度と春乃はお兼を訪ねた。お兼は日頃の過勞から、からだはひどく弱つてゐた

が、格別の病氣があるとはおもへなかつた。ある日の診察に春乃ははじめて、胎兒の臀部を子宮底にさぐることができた。こみあげてくる喜びに、春乃は手さきのかすかなふるへをさへ感じた。喜びのこゑをおさへ、心をおちつけて觸診を終へて聽診に移つた。今度は正しい胎兒の心音が、はつきりと耳につたはつた。胎兒の位置は、頭部を下に、母體の左の方へ向いた正常な第二胎向に變つてゐる。診察をすつかりすましてから、春乃はその事實をしづかにお兼に告げた。そして絕對に雙兒ではないことをもつけ加へた。妊婦のたるんだ頰に弱々しい微笑がうかんで、眼は安堵と喜びと感謝とにかがやいた。順調な經過をとつて、十日後にお兼は男の子を生んだ。

釜の湯を盥にとり、水を注ぎ手を入れてかげんを見た。まだ熱い。なほ柄杓にいくつかの水を注ぎこんだ。抱いて來た赤兒のからだをそのなかに首までとつぷりとつけて、大きくひろげた自分の兩手のなかにかくれるほどの肉塊を、撫でるやうにして、春乃はしづかに洗つた。赤黑い小さな生きものは弱々しい聲をあげて泣きだした。やはらかな肌に浸みとほるぬるま湯のおだやかな刺戟は、ぢきにしかし彼を鎭め、咽喉をもれる息の音だけが、外にあるときよりはいくらか早目だつた。洗ひ終ると白い大きなタオルにくるんで、兩手に抱へて、春乃は赤兒の顏をしげしげと見た。闇と光のけじめのつかぬ渾沌のなかに彼の頭腦はなほ何かの幻影を追うてゐるのだらう。赤兒の沐浴に每日通つて來て、春乃は今日で一週間目である。明日からはもう家人の手に委ねてしまつてもいゝだらう。一つの仕事を終へたあとの滿足と氣安さに春乃の胸は大きくふくらんだ。今年の春から村におちついて、妊婦の世話を見るやうになつてから、自分の手にかけてこの世の日

の目を逢はせたちやうど十人目の赤兒の顏を見てゐるうちに、春乃は、一人の赤兒を取りあげるごとにきまつておちこむ一つの感傷に今も亦おちこんだ。（不幸な小さきものよ、なんとまァお前は、わるい時代に、そしてまたわるい環境にとびだして來たもんだ！）春乃はさういふ誇張した感傷のなかに、自分でそれと知りながら、しばし浸つてゐるのであつた。だが春乃のこのつぶやきは、實は別な一つの喜びの感情から出てゐる反語だつた。また一人小さな新しい仲間を得たと、ほんたうに自分の實感から、春乃はしみじみと喜ぶのだつた。踏まれても蹴られても、手をのばし足をのばして貪慾なまでに育つ力を持てと叫びたいほどの氣持である。何年ぶりかで自分の村へもどり、生れた家におちつかなければならなくなつたとき、資格を得ながら、今まで生かして使ふ暇もなかつた産婆の仕事をはじめようとすぐにも心をきめたのにはわけがあつた。この困難な時代に、どんな形ででも絶えざる接觸を村人たちと保つて行くには、この仕事は容易には得がたい手段であつた。それにもう一つ、今の春乃は月々たとへ少しづつでも自分の生活費以外に現金を必要とするやうな事情にあつた。しかし月日を經、自分の手がけた子供がふえるにつれて、春乃はさういふ二つの目的をはなれても、仕事そのものに充分な喜びを持つことができるやうになつた。暇をみてはその子供たちを順ぐりに訪ねてまはるのだつた。

春乃は抱いてゐる赤兒を見た。餘りきりやうよしとはいへぬ子供である。この數日天氣がつづくので、それに春乃がこの家をたづねてくるのはいつも晝まだから、野良に出てゐるこの子の父親にはまだ一度も逢つてゐない。父親似か母親似かもわからない。低いが太い鼻柱や、大きな耳や口やは、案外しぶとい一筋繩では行かぬ人間に育つかも知れぬ。春乃は赤兒を高く抱きあげ、あばばばといつて少しゆすぶるやうにし、それからそつとくちづけした。

部屋へはいつて行くと、向う側をむいて寢てゐた產婦が、寢がへりをうち、兩手をひらいて春乃の方にさしのべた。瘠せて蒼ざめた顏に、靜かな微笑をたたへ、春乃の手から赤兒をうけとつた。しばらくさうしてぢつと見つめてゐた。そしていつた。

「まア、なんてこいつは色の眞黑な黑坊主だか！　春ちやん、なんぼおらでもこつたら黑いみぐさい奴アはじめてだがね。」

おほぎやうに溜息まじりにいつたが、その言葉にはかへつてあふれるやうな喜びのいろがかくせなかつた。

「なにを、をばさん。普通ですよ。それに目も口も大きくてなかなか豪傑ふうをしてるぢやないの。生れたては色の黑い方が、あとで色白にふとるつていひますしね。」

「赤兒は妙なもんでなア、春ちやん。」と、お兼はしみじみといつた。「子を孕んだとなつた時にや、またかとほんたうに氣おちがして、何をするにもしばらくはせいがでないやね。むしやくしやとただわけもなく腹は立つし――なにせえ、滿足に育てられつかどうか、わかんねえだから。それがいよいよ生れて見りや、やつぱし生れてよかつたといふ氣になるだからね。」

もう晝に近かつた。春乃は井戶端へ下りて行き、はねつるべをきしませながら水を汲んだ。流しに水を滿したまま洗はずにおいてあつた鐵鍋をたわしできれいに洗つた。庭の隅には彼女が乘つて來た自轉車がおいてある、その自轉車のうしろにつけて來た、大きな風呂敷包みをといた。そのなかはまた二つの包みになつてゐる。その重さうな一方から、春乃は甘藷の山を土間の片隅にあけた。他の一方からは甕がでてきたが、それには味噌がはいつてゐる。春乃は洗つた鍋を提げ、この一週間のあひだにもう自分の家のやうに勝手を知つた臺所へ行つて、しばらくコトコト音をさせてゐたが、田へ行つてゐる主人に湯を運んで老婆が歸つて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com